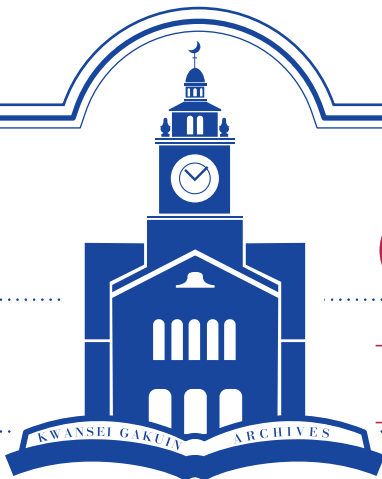


Kwansei  
Archives



Gakuin  
Newsletter

学院史編纂室便り

No.

61

特集：短期大学／幼稚園／千里国際

2026・春学期

- |   |                        |                                |
|---|------------------------|--------------------------------|
| 1 | 小見 のぞみ<br>関西学院短期大学副学長  | 保育とキリスト教のHoly Union——関西学院短期大学  |
| 2 | 赤木 敏之<br>関西学院幼稚園主幹保育教諭 | キリスト教保育の実践——関西学院幼稚園            |
| 3 | 土井 直彦<br>千里国際キャンパス宗教主事 | 千里の丘にて「Mastery for Service」を臨む |
| 5 | 倉田 麻里絵<br>関西学院大学博物館学芸員 | 定方塊石、岡山県立美術館へ                  |
| 6 | 学院史編纂室                 | 活動報告                           |
| 6 | 赤江 達也<br>学院史編纂室長       | 編集後記——総合学園としての関西学院             |

# 保育と基督教の Holy Union

## ——関西学院短期大学

関西学院短期大学副学長・教授・宗教主事 小見 のぞみ

総合学園である関西学院における短期大学について語ろうとすると、2024年に関西学院短期大学と名称変更する前の聖和短期大学、つまり聖和と関西学院の関係をふまえる必要がでてきます。そして、その関わりは歴史はとて長く深く深いものです。

現在の西宮聖和キャンパスは、もともとアメリカン・ボードが建てた神戸女子神学校が1932年に開いた校地ですが、この学校は当時、神戸の地で廃校寸前の状態でした。それが、「永久的位置は、神戸女学院及び関西学院の附近たること」を条件のひとつとして存続することになり、岡田山へ移転したのです。つまり関西学院が1929年に原田の森から上ヶ原へと移転していなければ、「附近たる」岡田山に神戸女子神学校はありませんでした。そしてこの地に神戸女子神学校がなければ、後に戦争で校地を追われた大阪のランバス女学院が移転してきて、聖なる和合(Holy Union)を遂げ、聖和女子学院が生まれることもなかったわけです。

そもそも、聖和の3つの源流のひとつ、ランバス記念伝道女学校は、関西学院の創立者ウォルター・ラッセル・ランバスの母、メアリー・イザベラ・ランバスが、ランバスファミリーの住まいであった山2番館を教室として開放したところから始められた学校です。そしてメアリーが亡くなった後も、大阪へ移転してからも「ランバス」の名を冠した女性たちのための学校は、関西学院の人たちの協力を得て教育をすすめていきました。



2列目左から5人目がウォルター、2人挟んでJ. C. C. ニュートン

この写真は1907年、日本のメソヂスト系三派の合同に際し、米国南メソヂスト監督教会の全権大使としてウォルターが来日した折、亡き母メアリーの学校を訪れている様子です。ウォルターはずっと、貧しい伝道女学校をポケッ

トマネーで支え続けていました。

このように関西学院は、聖和の存続と2009年の合併、学校法人聖和大学の解散に至る128年の歴史にとって、初めから終わりまで切っても切れない関係にありました。その結びつきの詳細は、『関西学院史紀要』(第22号、2016年)をご覧ください。ここからは短大の特徴である、もうひとつの結びつきについて述べたいと思います。

本学は、保育科のみの短期大学で、基督教保育を学ぶことができる保育者養成校です。もちろん基督教保育を掲げる養成校は他にもありますが、関西学院短期大学のユニークネスは、歴史的、継続的になされてきた保育と基督教のHoly Union、すなわち、保育を基督教神学や聖なるものとの結びつきのなかでとらえ、行ってきたことだとわたしは考えています。

本学の前身である聖和の始まりは、先述のように神戸女子神学校であり、パイブルウーマンを養成するランバス記念伝道女学校でした。また、幼稚園と保育者養成のルーツは、女性宣教師(N. B. ゲーンズ)が設立した広島女学校附属幼稚園と保姆師範科です。JKU (Japan Kindergarten Union: 1906年に宣教師らによってつくられた基督教保育の園と養成校の全国組織)の年次報告書には、大阪のランバス女学院が保育専修部と神学部二つの学部を有していることの重要性が述べられています。片方では、なし得ないことがある……と。

この伝統は戦争中、全国の女子神学校の併合に伴い、神学部を廃部したことにより、いったん中断されますが、戦後、神戸女子神学校側からの要請により宗教教育科の設置という不思議な形で聖和に引き継がれていきました。こうして聖和大学は幼児教育・保育系の学科だけでなく、基督教教育学科を有する大学として歩んだのです(『アメリカン・ボードと日本の基督教主義学校』基督教新聞社、2026年、第6章「神戸女子神学校」参照)。

その後合併を経て、今こうして神学部がある関西学院という総合学園のなかに短期大学保育科が存在していることに、計り知れない意味を感じています。互いに結び合う和合の源は、イエス・キリストにあることを「聖和」の名は表してきました。分断や切り捨てが広がる社会のなかで、多様な学校種と人々が集うなかで、関西学院をひとつ(の総合学園)にするのは、基督教主義教育という点においてではないでしょうか。(こみ のぞみ)

# キリスト教保育の実践 ——関西学院幼稚園

関西学院幼稚園主幹保育教諭 赤木 敏之



## 幼稚園の歴史

本園のルーツは、広島英和女学校（現広島女学院）にさかのぼる。1891年にアメリカ・南メソヂスト監督教会宣教師 N. B. ゲーンズにより広島英和女学校保姆師範科の附属幼稚園として創立され（正式認可を受けての開園は1892年9月）、その後、同師範科がランバス女学院として大阪に移転すると同時にランバス女学院附属幼稚園となった。さらにランバス女学院が聖和女子学院として兵庫県西宮へと移転するのに伴い、附属聖和幼稚園、そして、聖和大学附属聖和幼稚園としての歩みを続け、2009年4月、関西学院との合併により学校法人関西学院聖和幼稚園に、また、2016年4月、関西学院幼稚園と名称変更した。そして、2025年4月より時代のニーズに応じるため「幼保連携型認定こども園関西学院幼稚園」へと移行した。

### 幼稚園の流れ

養成校の附属幼稚園、一つの学校としての幼稚園、認定こども園としての幼稚園

1887	1896	1921
広島英和女学校	広島女学校	ランバス女学院
1891	1896	1921
広島英和女学校附属幼稚園	広島女学校附属幼稚園	ランバス女学院附属幼稚園

1941	1950	1964	1981
聖和女子学院	聖和女子短期大学	聖和女子大学	聖和大学
聖和女子学院附属幼稚園	附属聖和幼稚園	附属河原町聖和幼稚園	附属北聖和幼稚園
	1955	1961	1974
	附属聖和第二幼稚園	附属岡田山聖和幼稚園	附属南聖和幼稚園

1981	2009		
聖和大学	関西学院		
1987	2009	2016	2025
附属聖和幼稚園	聖和幼稚園	関西学院幼稚園	幼保連携型認定こども園 関西学院幼稚園

## 教育・保育実践で大切にしてきたこと、していること

創設当初から、聖書における子ども観（一人ひとりの子どもたちは神様に愛されている存在）をもってキリスト教主義による教育・保育を継承してきている。『幼な子をキリストへ』『キリスト教精神に基づいた保育』『キリスト教主義の教育・保育』という理念・精神は、名称、所在地が変わっても一貫している。

建学の理念・精神を実践するために源流として流れていることは、目の前にいる、今を生きている子どもたちにとって、そして未来を生きる子どもたちにとって、「何が大切なのか」「何が必要なのか」を保育者が熟考し、実践してきたことである。広島、ランバス時代を通じて働かれた M. M. クック女史はキリスト教に基盤を置いた子ども中心の保育を重視していた。「その方、祈って、考えて、責任をもつ

て」といつも言われていた。今の時代も大切にキリスト教教育・保育実践していきたい言葉である。

初期の時代の保育は、Kindergarten の創設者フレーベルの考えを踏襲するものであったが、ランバス女学院附属幼稚園の頃から、当時アメリカの幼児教育の主流であった進歩主義教育に基づく自由保育の形態を取り入れた。学びの主体を保育者ではなく子どもにおく児童中心主義、子ども中心主義の考え方であり、現在の教育・保育の根幹をなすものとなった。そして、この流れが現在の教育・保育の原型となっている。

1999年、現在の園舎が竣工された際に、保育者で熟考し園庭を大幅に見直した。現在の子どもたちは生活の中で、虫を捕まえたり、草花、葉などで遊んだりする機会が激減している。起伏のある場所で駆け回って遊ぶ機会もなくなってきている。自然の中で五感を使って遊ぶ経験ができるように、園庭の既成の鉄製の滑り台、ジャングルジム、ブランコなどは撤去し、築山を造り起伏のある環境、そして、樹木、草花を多数植え、保育者考案の木製遊具を設置し、園庭を平らなグラウンドではなく、森のようにしたのである（下記写真）。



幼稚園園庭

本園は、穏やかな雰囲気を出し、園全体が愛されていることを感じられる空間であることを目指している。

時代が変化しても、これからも一人ひとりの子どもたちにあたたかなまなざしを注ぎ、一人ひとりの子どもたちが「愛されている自分」を感じ「喜びをもって」「主体的に」「共に」育つように援助し、キリスト教主義教育・保育を展開していく。

（あかぎ としゆき）

# 千里の丘にて「Mastery for Service」を臨む ～ SIS と OIS

関西学院千里国際キャンパス宗教主事 土井 直彦

## 沿革とその理念、そして「Mastery for Service」

千里国際キャンパスは箕面市の東端、茨木市との境に近い千里丘陵にあります。1991年に学校法人千里国際学園として創設され、4月に大阪国際文化中学校・高等学校（Osaka Intercultural Academy：OIA）が設立され、8月に大阪インターナショナルスクール（Osaka International School：OIS）を併設するかたちで教育を開始しました。現在も幼稚園から高校まで、全て合わせても800人前後の小さい学校です。一つのキャンパス内に学校教育法に基づく“一条校”とIB（国際バカロレア）カリキュラムに基づく“インターナショナルスクール”が、施設や教員、一部の授業を共有する形で存立している学校は他に例がなく、“Two schools together”を合い言葉に、ユニークな教育活動を展開しています。大阪国際文化中学校・高等学校（OIA）は1999年に千里国際学園中等部・高等部（Senri International School：SIS）に改称しますが、2010年の合併を経て関西学院千里国際中等部・高等部（Senri International School of Kwansei Gakuin：SIS）となり、大阪インターナショナルスクールも、関西学院大阪インターナショナルスクール（Osaka International School of Kwansei Gakuin：OIS）と校名を変更しました。

千里国際学園のそもそもの成り立ちは、1980年代の急速な国際化に伴い、海外から帰国した子どもや、日本在住の外国人家庭の教育ニーズが増大し、これらに対応する多様な学校教育が求められたことに端を発しています。このニーズに対して文部省（当時）は「国際性」や「多様性」を重視し、国際的なカリキュラムを導入した「新国際学校」構想を打ち出しました。その構想を受け、近畿財界や主として阪急電鉄を中心に“あたらしい学校”を創り出すことを目的に設立されたのが、二つの学校を併せ持つ千里国際学園でした。

国際基督教大学（ICU）高等学校の教頭として帰国生の受け入れに奔走していた藤澤<sup>ふじさわ</sup>院氏は、設立準備室の中心メンバーとして請われ、2年の準備期間を経て開学し、SISの初代校長となります。7年間校長職を務められましたが、校内機関誌で設立当初を回顧された場面で、学校のハード面の構築以上に人（教員／職員）を選び、ルールを作り、理念を固めることの難しさと大切さを振り返っておられます。設立当初の採用予定者と5日間にわたって宝塚のホテルで討議を重ね、目指す人間像「Informed, caring,

creative individuals contributing to a global community」とその手段としての「5つのリスペクト（Respect for self, others, learning, environment, leadership）」を校是としました。目指す人間像は現在「知識と思いやりをもち、創造力を持って世界に貢献する個人」と訳されていますが、初めに英語での文言があり、この言葉を学校の一致した理念としました。

3年前に赴任した筆者は現在SIS中等部で「5Respects」を、高等部で「Mastery for Service」の授業を担当していますが、千里国際学園が関西学院と合併する以前から作られたスクールミッションは、関西学院が掲げる「Mastery for Service」と多くの点で重なり、繋げることのできる考えであることを多々感じます。

千里国際学園高等部が2005年に関西学院と連携協力協定を締結し、推薦制度が始まると、関西学院の国際学部設立構想を背景として2008年から合併協議を開始します。国際化を推し進めたい関西学院と「世界市民」の育成という千里国際学園の考え方が重なり、2010年に千里国際学園は関西学院と合併します。過去の資料を紐解くと、そこで示された合併には単なる利害による一致以上の教育的な方向性・目的の共有があったように感じられます。



千里国際キャンパスエントランス

## キリスト教主義教育の素地

前述の千里国際学園の成立は、国際化の流れの中で、行政や財界、鉄道会社の主導のもとと社会のニーズに応じ作り上げられたことが前提となり、そこに宗教的背景や特定の思想的基盤があったわけではありません。しかしその目指す人間像の根本には人間に対する友愛の精神と、社会（世界）に対する積極的な貢献を求める意識が深く示されています。



SIS 初代校長藤澤氏は、ICU 出身であり、熱心なクリスチャン（日本基督教団野田教会員）でした。藤澤氏は自身がキリスト教主義教育の重要性と価値観を理解されていましたが、同時に国際性や文化の多様性を考えた時に、帰国生を中心とした様々な背景を持った生徒を迎えるにあたっては、多様な宗教観や信仰に対して寛容であらねばならないこと、また実際の生活においても食事や習慣など宗教を背景とした文化的側面への細かい配慮が必要なことを、設立時の必要な検討事項として振り返っています。

また、OIS 初代校長のジェームス・ウィズィ（James Wiese）氏は、ルター派の牧師として聖望学園で校長職とチャプレンを兼任されていた人物でした。牧師として活動する傍らアメリカンスクールインジャパン（ASIJ）の教育開発ディレクターを兼任していた際に、その経験と実績から推薦され“あたらしい学校”の創設に参画されました。また地域伝道のために活躍し、教会設立に協力したことが記録されています。設立された教会は、近隣在住の国籍や文化の異なる人々を対象とした超教派の教会であり、校内のキリスト教信仰を持つ教職員の受け皿的な位置づけでもありました。

ICU 高校在職時から国際学校の研究の先駆者であった藤澤氏は校内の『研究紀要』（第3号 1995年）の中で日本における国際学校を典型的に分類し、その特徴や学校の在り方を丁寧に論考していますが、そこでは、千里国際学園を「自国民の国際人養成と外国人受け入れのための国際学校」の類型に位置づけています。同時に日本の国際学校の先鞭がキリスト教解禁時に設立されたカトリック校（横浜のサン・モール国際学校）であり、日本の国際学校の在り方がキリスト教を土台とした学校から始まったことに多くの紙面を割いています。

このような背景からも、千里国際学園は創立時にキリスト教主義教育を行うことを目的として設立されたわけではありませんがその人間観や土台となる理念の根底にキリスト教主義教育と重なる点を多く持っていたことは想像に難くありません。その上で、自他を尊重し、学ぶことを大切に、周囲と世界を見渡して、主体的に社会に貢献する世界市民を育成することをスクールミッションとして千里国際学園が設立されたことは、後に関西学院と関わる上で重要な点となったことが理解できます。

## 2つのミッションを併せ持つ学校として

藤澤氏、ウィズィ氏共に、2010年の関西学院との合併時には千里国際学園を去られておられますが、設立時のミッションは現在も息づき、校内でも学びと生活、それぞれの場面で口にされ、また実際の教育の場面で具体的にどのように展開すべきか、日々研究が継続されています。

同時に、千里国際キャンパスは関西学院と合併後15年を経て、また新しい歴史を刻もうとしています。関西学院のスクールモットーである「Mastery for Service」は、それまでの千里国際学園時代の考え方に置き換わるものではなく、真の「世界市民」を世界に送り出すと言う発想において結びつく概念です。「世の人に仕える（奉仕するため）」に自身をいかに「研いて（研鑽）」いくのか。人々の弱さや辛さに向き合い、身を捧げたキリストをロールモデルとして学びを深めようとする「Mastery for Service」は、本キャンパスの教育を更に広げるきっかけを与えます。

合併後、長らくキリスト教主義教育の専従者が不在であったため、千里国際キャンパスでのキリスト教主義教育はまだまだ始まったばかりです。しかし、同時に関西学院がこれまで培ってきた「Mastery for Service」の理念は千里国際キャンパス従前の理念と重なるだけでなく、「世界市民を育む」ことの基盤となって千里国際キャンパスに浸透し、「他者に仕える」人材を生み出していくと信じています。

関西学院に連なるひとときわユニークな千里国際キャンパスに、是非足をお運び下さい。心より歓迎致します。

（どい なおひこ）



千里国際キャンパス中庭

essay

## 定方塊石、岡山県立美術館へ

関西学院大学博物館学芸員特別准教授 倉田 麻里絵

## 特別展「美と祈り—近現代日本美術にみるキリスト教」

関西学院に美術制作の専門教育機関はないが、卒業生のなかには在学中に画家を志し、その道で活躍した人たちがいる。多くは洋画や版画であるが、定方塊石<sup>さだかたかいせき</sup>（1882-1966、本名は末七郎、普通科卒）はキリスト教主題の日本画を遺した異色の画家である。定方が岡山県出身であることから、岡山県立美術館で開催された特別展「美と祈り—近現代日本美術にみるキリスト教」(2026年1月9日-3月1日)に、学院史編纂室所蔵の3作（《平和の基督》1930年、《宮潔めの基督》制作年不詳、《緑の野いこいの水辺》1940年）が展示された。

「美と祈り」展は、岡山県立美術館学芸課長・橋村直樹氏が2010年より同館で進めてきた調査研究のなかで、近代以降の日本美術におけるキリスト教絵画や、キリスト教に関連する表現に着目したことによって実現した。氏の専門はビザンティン美術であり、亡き恩師<sup>すずき みちたか</sup>・鐸木道剛氏が日本人初のイコン画家・山下りん（1857-1939）を研究していたという背景もある。西洋美術に学ぶことで形成された近代日本美術には、キリスト教の「信仰に根ざした造形や宗教的精神性に共鳴した表現」（本展図録 p. 1）が見られる作品がある。しかし、こうしたキリスト教的精神の影響を体系的に扱う展覧会は、これまでにほとんどなかったという。橋村氏は本展について「日本美術史における「広義のキリスト教美術」（キリスト教の影響をもとに生まれた表現）の可能性を提示することで、鑑賞者にさまざまな祈りのかたちを感じてもらいたい」と語った。

本展は時代順ではなく、「伝来と沈黙」「聖書と美」「歴史と応答」「祈りとかたち」「イコンと絵画」「土地とまなざし」という6つのテーマによって構成されている。終章の「土地とまなざし」は、キリスト教が教育・福祉を通して地域社会に浸透した歴史を有する岡山にゆかりのある作家の紹介であり、ここに定方が展示された。

## 定方塊石と関西学院

幼少期からキリスト教に接していた定方は、岡山教会の薇陽学院<sup>びよう</sup>に入学するが廃校したため、1896年に関西学院普通科に入学した。画家志望であることを当時の院長・吉岡美国に相談し、吉岡の紹介により京都の仏画家<sup>こせ</sup>・巨勢小石<sup>しゅうせき</sup>（1843-1919）に師事する。クリスチャンの定方が日本画でキリストを描きはじめてのは、巨勢の薦めであった。

キリストを描くことを決意した定方は、旧友の神崎驥一（当時高等商業学部長）と畑歎三（当時文学部教授）に薦められ、1922年より3年半、欧米に遊学しキリストに関する研究材料を求めた。その期間に日本から携えた《観音像》がフランスのサロン・ドートンヌに入選している。帰国後は依頼された「富士百景」の木版画を制作するなかで、日曜を《平和の基督》の制作に費やし、1年をかけて完成させた。本作は1931年に東京府美術館（現・東京都美術館）で開催された二科展主催の第2回日本アンデパンダン展（3月1日-20日）に出品されたのち、同年4月に教育と吉岡に対する感謝の意を表して関西学院に寄贈された。

寄贈後は図書館（現・大学博物館）の踊り場に掛けられていたが、戦時下にインクで汚損されたようである（『関西学院新聞』1951年4月20日付）。当時は額装されていたため、おそらく本紙はガラスによって守られたのだろう。修理の記録がないため詳細は不明であるが、軸装された本作は1983年より学院史編纂室に収蔵されている。このほか学院史編纂室には、かつて中学部の講堂に掛けられていた定方の《富士山麓山中湖キャンプ風景》（1951年）という作品もある。富士を背景に制服姿の少年たちが輪になって祈る様子が描かれている。

定方は『関西学院新聞』の校地移転1周年記念号（1930年6月25日付）に「私の一生の事業は画家で神意を顕はす事」「筆で神意を顕したい基督を絵きたい」（原文ママ）と意気込みを寄せている。定方の作品の多くは東京大空襲で焼失したが、「美と祈り」展では、仏画家の巨勢との関係を想起させるような仏教図像を引用したキリスト像も紹介された。定方の再評価がはじまっている。

（くらた まりえ）



「美と祈り」展で展示された定方作品3作（学院史編纂室所蔵）

# 活動報告

関西学院史  
紀要  
第三十号

## 刊行物

『関西学院史紀要』第32号(2026.03.15発行)目次

### 論文

関西学院とブランデン／中島俊郎

J・C・C・ニュートンにおけるエキュメニズムと倫理思想の研究

前編／神田健次

岩橋武夫とヘレン・ケラーの交友についての試論／室田保夫

竹友藻風、志賀勝、由木康、曾根保、岩橋武夫、寿岳文章(二)

一関西学院の英語教育が育んだ人びと一／井上琢智

松谷基和「関西学院神学部の朝鮮人留学生の実相」に関する一考察／洪伊杓(序文：神田健次)

### オーラルヒストリー

関西学院大学とわたしの民俗学／八木康幸(解題：島村恭則)

### 研究ノート

治安維持法下における関西学院神学部生の弾圧一中森幾之進と三

好麟児に焦点を置いて一／三好直美

### 資料

神崎驥一日記 六／井上琢智

吉岡美国のアメリカ留学(一)

一ヴァンダビルト大学卒業証書・

卒業式次第一／赤江達也

### 記録

神戸・原田の森、知の交差点一関西学院を通じた社会に関する知の形成一／荻野昌弘

関西学院と岩橋武夫一ヘレン・ケラーとの交友を中心に一／室田保夫

### 学院史編纂室共同研究報告

「宣教師研究」舟木讓

「関西学院の戦前・戦中・戦後」井上琢智

「関学オーラルヒストリー」赤江達也

「関西学院の学問と社会」荻野昌弘

「ベーツ日記研究」ベネディクト・T

編集後記／赤江達也

## おもなイベント

2025.06.24 「第59回関西学院史研究会」開催

演題：神戸・原田の森、知の交差点

一関西学院を通じた社会に関する知の形成一

講師：荻野昌弘氏(関西学院理事長、関西学院大学名誉教授)

2025.11.27 「第60回関西学院史研究会」開催

演題：関西学院と岩橋武夫一ヘレン・ケラーとの交友を中心に一

講師：室田保夫氏(関西学院大学名誉教授)



## 資料紹介 「定方塊石氏の不朽の大作」

定方塊石《平和の基督》除幕式(1931年4月18日)

1931年、定方塊石から母校関西学院に絵画《平和の基督》が寄贈され、中央講堂で除幕式が挙行された。除幕式の壇上には、左から吉岡美国名誉院長、H. F. ウッズウォース文学部長、曾木銀次郎副院長、T. H. ヘーデン名誉神学部長、定方の畏友神崎驥一高等商業学部長の5人の姿が見える(写真1)。

『関西学院新聞』では、「定方塊石氏の不朽の大作」という見出しのもとで、この寄贈は関西学院の教育と恩師吉岡美国に対する感謝を表すものであること、《平和の基督》というタイトルは聖句「すべて疲れたるもの重荷を荷へるものは我に來れ」に由来するものであることが報じられた(第63号、1931年4月20日)。

寄贈後の《平和の基督》は、時計台(旧大学図書館)内に飾られた(写真2)。その後、「額装」が「軸装」に変わり、現在は学院史編纂室に所蔵されている。

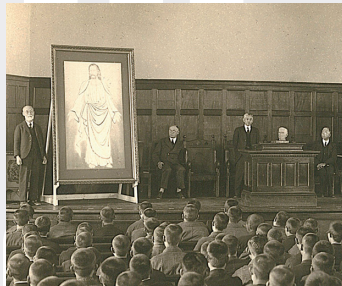


写真1 中央講堂での除幕式

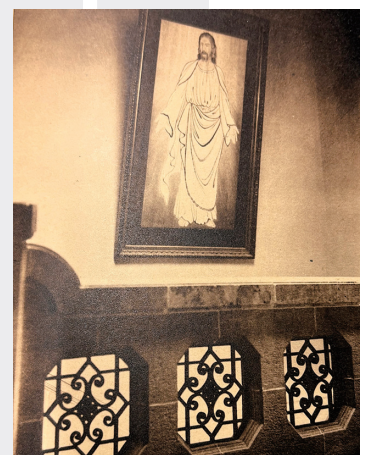
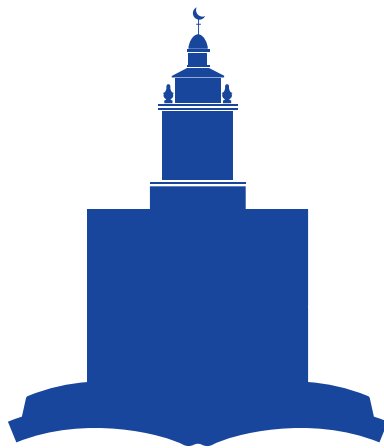


写真2 時計台の《平和の基督》

## 編集後記——総合学園としての関西学院

本号の特集テーマは「短期大学／幼稚園／千里国際」です。西宮聖和キャンパスと千里国際キャンパスの現場を担っている方がたの文章を通して、「総合学園としての関西学院」の現在が浮かび上がってくるはず。本誌バックナンバーをオンラインで公開していますので、第59号の「特集：総合学園」とあわせてお読みいただけたら幸いです。(学院史編纂室長 赤江 達也 あかえ たつや)



『学院史編纂室便り』第 61 号

2026.6.15 (ISSN 2436-1518)

関西学院大学 学院史編纂室  
〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町 1-155  
TEL: 0798-54-6022

<https://ef.kwansei.ac.jp/archives> (日本語)  
<https://ef.kwansei.ac.jp/archives/history> (英語)

